FA・計測・制御

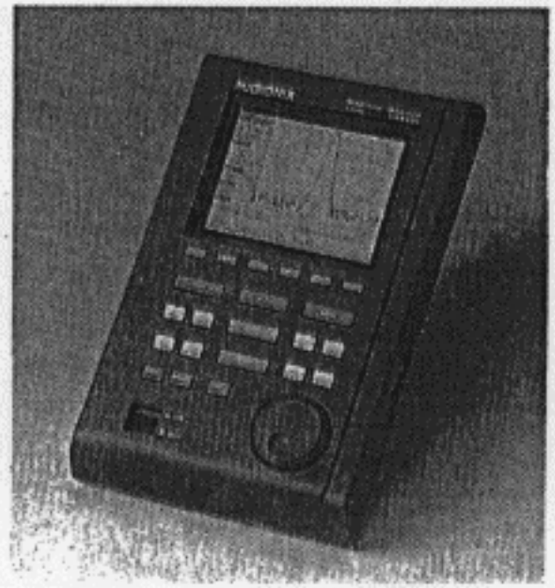
マイクロニクス

通信用計測器市場に参入

第1弾製品、3.3GHz帯域のハンディ型スペ・アナ投入

ベンチタイプ並み性能と機能を実現 柱の一つに育成

マイクロニクス（本社＝東京都八王子市、田仲克彰社長）は、通信用計測器市場に参入する。第一弾製品として、三・三GHz帯域のハンディ型スペクトラム・アナライザー「MSA338」を開発、市場投入した。無線LANなどの普及拡大で需要の見込めるフィールド向けに特化、後発ながら国内で一千台、海外で二千台の年間販売を目指す。今後「ラインアップを強化し、柱のひとつに育成していく」（佐野雅昭取締役・研究開発部長）構えだ。



マイクロニクスのハンディ型スペクトラム・アナライザー「MSA338」

「MSA338」は、ベンチタイプのスペクトラム・アナライザーと同等の性能・機能をハンディタイプで実現するべく開発に着手。縦二六〇×横一六二×奥行き七〇ミリ、重さ一・七キロの小型・軽量化を実現した。三十九万八千円の価格設定で、低価格を強調する。

各種移動体通信、ワイヤレス・インターフェイスのフィールド評価やサービス用途に対応。ダイポールアンテナもPDC、PHS、W-CDMA、GSM、二・四GHz無線LAN、ブルートゥース用と、豊富に揃えた。

主な仕様は、測定周波数帯域一〇〇kHz―三・三GHz、中心周波数設定分解能一〇〇kHz、平均雑音レベル約九〇dBm以下、基準レベル設定ステップ一dB。

チャンネルパワー、隣接チャンネル漏洩電力、占有周波数帯域幅などのデジタル変調向け測定機能、EMI評価向けの磁界強度測定、各種演算機能、オートチューニング、オートレンジを備える。

ワンキーでハードコピーできる小型プリンター、横軸一千点の高分解能表示ができるパソコンソフト、内蔵バッテリーをオプションで用意。バッテリーは、フル充電でおよそ百分の稼働が可能だ。

同社は、タイムインターバルアナライザーやデジタルオシロスコープを中心に事業展開してきたが、ここ数年ETC検査装置分野へ事業を拡大、ETC用自動試験システムではトップシェアを確保している。

今回市場投入したスペクトラム・アナライザーは、ETC検査装置に次ぐ、第二の柱に位置付ける。

近く一・八GHzモデル、六・六GHzモデルを投入する計画で、ラインアップの強化を進めていく。